

V 研究活動－資料報告・研究ノート等－

1 西蒲区御井戸B遺跡出土の石製模造品について

(1) はじめに

西蒲区（旧巻町）に所在する御井戸B遺跡から平成9（1997）年に実施された本発掘調査で石製模造品が出土しており、平成15（2003）年度に実施した確認調査の概要報告書〔前山・相田2004〕に遺跡を考える上で重要な遺物という形で報告されている。石製模造品は、古墳時代中期を中心に盛行する祭祀遺物であり、列島の広い範囲で確認されるが、地域的偏在が激しい特徴的な遺物である。新潟市内では、現時点で管身の知る限り、御井戸B遺跡出土例のみである。ここでは、御井戸B遺跡出土の石製模造品について紹介し、若干の考察を行う。

(2) 御井戸B遺跡出土石製模造品について

御井戸遺跡 御井戸遺跡は越後平野の西縁を日本海に沿って連なる山地帯の北端、角田山の南麓、矢垂川によって形成された扇状地ないし自然堤防上に立地する。縄文時代晩期に集落が形成され、古墳時代後期に至るまで断続的に集落が営まれたと考えられている。特に、縄文時代晩期と古墳時代前期を中心に多量の遺物が出土している。古墳時代前期には、近接した山地上に前方後方墳である山谷古墳が所在しており、その関係が指摘されている〔前山・相田2004〕。御井戸遺跡は隣接して御井戸A遺跡と御井戸B遺跡に分かれているが、一体の遺跡として評価できるため、細かく調査や出土場所を述べる場合はA・Bを分けるが、全体の評価においては御井戸遺跡と述べる。

出土状況 既に述べたように、石製模造品は平成9年実施の本発掘調査で出土した。調査によって、古墳時代の御井戸B遺跡東部は北部に埋没谷、中央に微高地、南部に低湿地が広がることが判明した。石製模造品はこのうち北部埋没谷の南岸斜面から7点出土している。集中した分布と限定された点数から、一括性の高い資料と考えられている。

石製模造品 ここでは個別の資料について述べる。なお、資料番号は報告書記載の番号を用い、石製模造品の分類等については〔金田2015〕を用いる。

1は扁平円型の剣形である。最大長4.2cm、最大幅2.2cm、厚さ5.0mm、孔径2.0mmである。全面に擦痕が確認できる。2は扁平半月型の勾玉形である。最大長

3.6cm、最大幅1.7cm、厚さ7.0mm、孔径1.0mmである。全面に擦痕が確認できる。3は双孔円型の板形である。最大長1.6cm、最大幅1.6cm、厚さ3.0mm、孔径1.5mmである。全面に擦痕が確認できる。他の板形に比べて、若干小形である。4は双孔楕円型の板形である。最大長2.3cm、最大幅1.9cm、厚さ2.5mm、孔径1mmである。前面に擦痕が確認できる。5は双孔円型の板形である。最大長2.1cm、最大幅1.9cm、厚さ3.5mm、孔径1.0mmである。全面に擦痕が確認できる。6は単孔楕円型の板形である。最大長2.3cm、最大幅1.9cm、厚さ3.0cm、孔径2.0cmである。表・裏面に擦痕が確認できるが、側面にはほぼ確認できない。7は単孔円型の板形である。最大長2.0cm、最大幅1.9cm、厚さ3.5mm、孔径1.0mmである。表・裏面に擦痕が確認でき、側面にも一部擦痕が確認できる。石材は、蛇紋岩を微量に含む滑石と報告されている。個々の色調は緑色から青色と異なり、特に7は若干異質な感じも受けるが、率先して異なる石材として分類できるものは無い。調整は、どれも全面に擦痕が確認でき、各形式で一般的に確認できる調整である。双孔型板形の側面は、擦痕の一つの纏まりの単位が少ないため、その境界の角が目立ち、少し角張る曲線を描く。単孔型板形のみ側面の擦痕が希薄で、粗雑な印象を受ける。

以上のように御井戸B遺跡では、勾玉形・剣形・板形の3種類の形式が確認でき、これらは定形三種類に分類され、多くの集落から出土する形式である。さらに、この時期について考える。新潟県は資料が少ないため、隣接地域の東北の例を参考にすると〔金田2015〕、概ね須恵器型式のTK73からTK208の時期の可能性が高く、なかでもTK216からTK208の時期の可能性はある。御井戸B遺跡出土の土器でも、TK73からTK208と併行する時期の土師器が確認されており、当該期の可能性は十分にある。

(3) 新潟県出土の石製模造品について

〔金田2015〕を基に新潟県の石製模造品の分布について概観する。新潟県において石製模造品が出土する遺跡は大きく2つに分類できる。実用品類（玉類形・紡錘車形）のみが出土する遺跡と、狭義の石製模造品として評価できる定形三種類（勾玉形は円型を含まない）が出土する遺跡である。このうち、定形三種類が出土する遺跡はほぼ中越地域以南である。この定形三種類が出土する遺跡は、分布の纏まりからさらに、糸魚川市周辺（以下

「糸魚川」、南魚沼市周辺（以下「南魚沼」、長岡市・新潟市西蒲区周辺（以下「長岡・旧巻」）の3つの地域に分けることができる。このうち糸魚川は、円型勾玉形や実用品類などと共に板形が中心となる。そして、石製模造品出土遺跡の多くは玉作遺跡である。一方、南魚沼では、定形三種類の中でも剣形が出土する。そして、長岡・旧巻である御井戸遺跡から定形三種類の3つの形式が出土している状況である。

(4) 御井戸遺跡出土石製模造品の意義

御井戸遺跡は、新潟県内で定形三種類が出土する石製模造品出土遺跡で最北に位置する（日本海側で見ると山形県庄内地域等で出土している）。御井戸遺跡出土の石製模造品は剣形を含む定形三種類の3つの形式が確認でき、南魚沼との様相と類似している。そのため、南魚沼との関係が深いと考える。

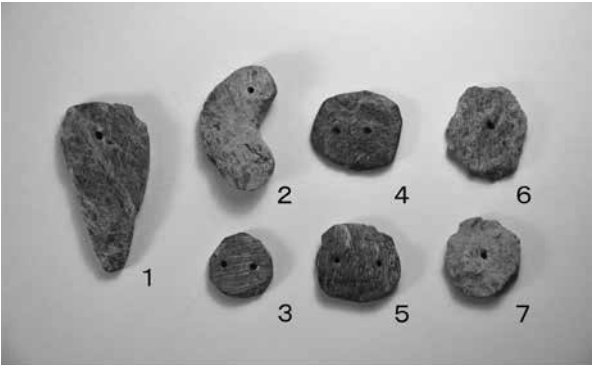
御井戸遺跡は、角田山の南麓から流れる矢垂川の氾濫源の微高地上に立地する。矢垂川は矢川に合流し、さらに西川に合流する。この西川は大河内分水路が開削される以前は、江戸時代に信濃西川と呼ばれる流路と同様の流路と考えられ、信濃川が寺泊市大河内付近で分岐する2つの流路のうちの1つである〔榎根1985〕。この信濃西川はもう一方の信濃東川（現在の信濃川とほぼ同様の流路）と新潟市平島で再び合流したと考えられ、信濃西川と信濃東川は川幅に大きな違いが無く、どちらも主要な流路であったと考えられている。また、信濃西川のような新潟平野の西側を流れる主要な流路は、弥生時代や古墳時代にも存在していたと考えられている〔鴨井・安井2004〕。

以上を踏まえ現在の河川で考えると、南魚沼市を流れる魚野川から信濃川、西川へと河川に沿った交流経路を

想定することができる。また、長岡市島崎に所在する大武遺跡や奈良崎遺跡からも板形石製模造品〔春日ほか2002・2014〕が出土している。大武遺跡や奈良崎遺跡は東頸城丘陵北東側付近の沖積地に立地しており、大河内分水路開削以前は旧島崎川と呼ぶ西川に合流する河川が付近を流れていたと考えられている。そのため、この大武遺跡についても、魚野川から西川の交流経路との関係が考えられる。

このように、御井戸遺跡から出土する石製模造品は南魚沼との旧河川沿いによる交流経路によって波及したと考えられ、さらに南魚沼は魚野川沿いを南下すると群馬県へとつながる。南魚沼と群馬県との関係は既に指摘されており〔寺村1972、安立2001〕、群馬県からは剣形で言えば、両面鑄くびれ型等の新潟県出土よりも古い型式の石製模造品が出土することから考えれば、群馬県から南魚沼、さらに長岡・旧巻へと波及したと考えることができる。このことから、古墳時代中期に群馬県から新潟平野西側を通る内水面交通によって日本海へと抜ける交流経路を想定することができる。御井戸遺跡はその交流経路上に位置し、交通の要所であったために、石製模造品が出土したと考えられる。

最後に、本論は御井戸遺跡出土の石製模造品の資料を報告すると共に、〔金田2015〕を基に御井戸遺跡出土の石製模造品の意義について若干の予察を行ったものである。しかし、新潟県内の石製模造品については、筆者自身の観察や考察に不十分な点が多く、誤認や誤解が含まれている可能性がある。今後、新潟県内の石製模造品についてより詳細に検討することで、御井戸遺跡出土の石製模造品の意義をより明確にしていきたい。（金田拓也）



御井戸B遺跡出土石製模造品

表1 御井戸B遺跡出土石製模造品観察表

報告番号	調査年度	グリッド	類型	形式	型式	法量				調整		石材	色調
						全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	表面	裏面		
1	1997	B7f	定形三種類	板形	扁平円型	4.2	2.2	5.0	2.0	擦痕	擦痕	滑石	暗青灰色
2	1997	B6n	定形三種類	勾玉形	扁平半月型	3.6	1.7	7.0	1.0	擦痕	擦痕	滑石	明オリーブ灰色
3	1997	B6n	定形三種類	板形	双孔円型	1.6	1.6	3.0	1.5	擦痕	擦痕	滑石	緑灰
4	1997	B8d	定形三種類	板形	双孔楕円型	2.3	1.9	2.5	1.0	擦痕	擦痕	滑石	明青灰色
5	1997	B6v	定形三種類	板形	双孔円型	2.1	1.9	3.5	1.0	擦痕	擦痕	滑石	青灰色
6	1997	B6i	定形三種類	板形	単孔楕円型	2.3	1.9	3.0	2.0	擦痕	擦痕	滑石	明青灰色
7	1997	B3-5	定形三種類	板形	単孔円型	2.0	1.9	3.5	1.0	擦痕	擦痕	滑石	明緑灰色

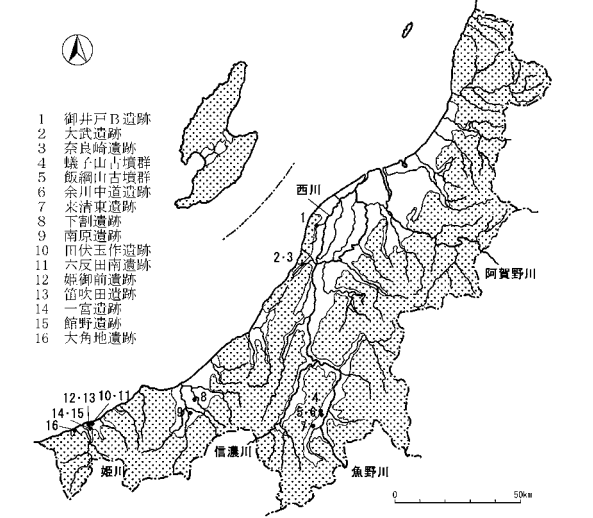


図1 新潟県における定形三種類（円型勾玉形除く）出土遺跡 (1/3,000,000)